

6 生成するイメージ： ボイスのドローイング

ドローイングが知っている

和田真由子 | 画家

—

—

スナップ写真とか詩のワンセンテンスみたいな…戯曲のひと台詞とか…、ドローイングを例えようとときに試しては、そうじゃなくて、と思い直す。ドローイングとはイメージを立ち上げる「場」のことである。レシートの裏面にも、大規模なアートピースの一部にも設けることができる。紙の上の染みや意味のない線が靈感によって何かに置き換わる時や、試行錯誤しながら材料を動かしたり配置し直したりする作業過程で場が立ち上がる。そして時を経て、現場検証に他者が入る。そこでは何かか燃えていたかもしれないし、びっくりするほど何も考えていなかったとわかるかもしれない。

—

ボイスが活動の手段になぜ美術を選んだのか、ドローイングを観るとそのわけが明確になる。描きながら考えている線、塗ってみてから理由を探している色、とりあえず分解してみた部位、絵に写してみたら秘密がわかるかもしれないという期待。意味、仕組みがわかりたいという素直な気持ち。イメージを紙の上の黒鉛や水で溶いた顔料という物質に置き換える過程を通して、ボイスは自分の世界観を伝える方法を確認していた。そしてただ伝わるだけでなく、それが美しいものである必要があった。

—

ボイスのドローイングを観るとき、作家を評する際の神

話や政治という決まり文句はフェードアウトしていく。そこには生き物としての混沌、欲望がずいぶん率直に造形化されている。そしてその表現は優れている。思いついたものが何かを考えながら可視化していく、ちゃんと美しいか確かめながら。美しいものを写してみると、内側にある醜悪が描き出されることもわかっている。つまりボイスは素直な表現者だった。これらを観ると、ときどき単純だと感じられてしまう彼の立体作品における造形にも納得がいくようになる。

—

理想を追い求める美しさは醜いことを、当然ボイスも知っていただろうと絵を見る限りでは思いたい。彼に人々の言う神話性(神話の生き物はみな政治をアクセサリに纏っている)を探すなら、それは高貴な醜さだと言えるだろう。

B 57

蜂の記念碑

—

台形に区切られた枠のなか、2匹のミツバチが逆さに吊され、その下には結晶化した蜜蝋が、これまた2つ置かれています。さらにその下に目をやれば、今度は卵形をした構築物も。ボイスにとってミツバチは、その芸術理念を象徴的に体現する重要な生き物でした。役割分担をし、群れをなすその生態も、おのれの熱を利用し巣を作るその造形も、すべてが来るべき社会の模範であるというわけです。いっぽう、この絵が描かれた支持体も見逃せません。消印を押され開封された封筒、つまりメッセージの運搬役という役目を終えたその紙は、郵便というかつての動態を想起させる点、蜂の記念碑と在り方を共にします。本作品においては、動と静の対比が、主題と素材の両面から示唆されていると言えるでしょう。

*紙作品のため展示期間が限られています。展示されていない時期もありますが、ご理解ください。

B 74

死んだウサギに絵を説明するには

—

1965年11月26日、デュッセルドルフのシュメーラ画廊にて、ボイスは死んだウサギと作品鑑賞を行いました。翌日